唐宋元明、或以銀造之、以竹造之、以梨造之、以海貝造之、茶匙其總名也、又有以銅造之者、可謂陋矣、

玉揭　象牙茶匙也（珠德作一品、當本能寺亂失之、適有下柄作葱臺者上）

蔡襄以金造之、蓋供尙茶之職也、茶錄曰、竹輕不便於取建茶、故以金造之、玉揭亦同、

撩雲　十六事之一

茶譜曰、撩雲者、竹茶匙也、

本國自古至今、茶人所作品形不一、長短縱之、撩雲之中、有節者未見之、或表質裏漆、或以金銀泥畫草花也、珠光引拙、珠德紹鷗所造、有節者蓋鮮矣、柄端五六分之間餘節者亦有之、中世宗易節置諸中分、諸家倣之、又曰、茶匙本末隨處有五名、人人能知之、象牙者、珠德及宗易俱作之、中世漆之、或人曰始於宗易也、

〔茶道筌蹄五〕茶杓之辨

象牙　元來唐物イモ茶杓などを寫したるなり

珠德形　珠光門人南都衆徒なり、珠德形はイモ茶杓のイモをとりたるなり、夫ゆへヲットリ太くして短し、大小あり、今にては小の方を通じ用ゆ、

利休形大小　今にては小の方を通じ用ゆ

塗茶杓　いにしへは象牙得がたかりし故、侘人は鼈甲又は角を塗用ゆ、黑塗は利休形、溜塗は紹鷗、一閑張は元伯也、

桑　利休形は象牙と形同じ、甫竹齋は桑にて竹の通に削たる有、

節なし　竹茶杓の眞削なり、珠光より始る、珠德、窓栖、羽洲、宗予（此人三代あり）何れも皆節なし、茶杓を削るに紹鷗はキリ留サカリ節を削る、利休は中に節ある也、（○略）

元伯已上は湯ダメなり、元伯已後は火ダメなり、